

## 『六月の一日』

詩 輪島貴史

包丁を見つめる 六月の一日  
これといって何がしたいわけではなく  
だからといってどうでもいいわけでもなく  
そんな人生なら せめて己くらいは鋭利にさらしてもよいだろう

コーヒーの染みが残るテーブルを蹴飛ばす  
とはいっても それで傾いたのではなく  
なんとなく歪んでいたのは最初から  
ゆえに積み重ね 沁み込んできたものくらいは自由にさせてくれ

太陽に祈る 神社は近くにあるけど 太陽に  
君はあたたかく 湯たんぽのようだから  
私のように冷えませんようにと祈り  
抱いてみたくなるけど みんなのものだから願うだけ

カッターを見つめた 六月の終わり  
しばらく見つめ 何かしようとする  
ただこの程度の刃では 傷はついても壊れはしない  
お前の狂気などその程度と 上から見下ろす もうすぐ夏